

平成21年度「酪農教育ファーム近畿地域認証牧場研究会」

日 時：平成21年12月2日（水） 11時～16時

場 所：おおさか府民牧場

主 催：近畿生乳販売農業協同組合連合会
酪農教育ファーム近畿地域推進委員会

参加者：酪農家など約25名

開催プログラム

PROGRAM

1. 体験：バター作り研修
2. 講習会
 - (1) 挨拶：酪農教育ファーム近畿地域推進委員会委員長 花房亨一郎
 - (2) 挨拶：おおさか府民牧場長 服部 孝二
 - (3) 酪農教育ファーム活動とその意義
全国の活動
近畿地域の活動
近畿生乳販売農業協同組合連合会 川勝秀人
 - (4) 酪農教育ファーム実践事例講演会
講師：リバティヒル広瀬牧場 廣瀬文彦
 - (5) アンケート実施
3. 視察：搾乳体験実践現場の視察



5人一班に分かれて、バター作りを行いました。

「今日は皆さんに2通りのやり方で、バター作りを行っていただきます。まず、小さな容器に生クリームを40cc入れていただきます。生クリームがまだ残っていると思いますが、これは、前の方にありますバターチャンの方にすべて入れてください。その時に、もうひとつの計量カップにお水が入っているのですが、そのお水も一緒に入れてください。」

「まずは、バターチャンの方から説明いたします。バターチャンは、一定方向にグルグル回していただくだけです。中の生クリームが壁にぶつかり、衝撃を起こしてたんぱく質の膜を壊していきます。バターができてくるとお水の音がしてきますので、そこまで回してください。」

「それともうひとつ、皆さんがお一人ずつ作っていただくカップバターですが、握って持ってしまうと熱が伝わってしまいバターができません。上下で挟んで持っていただくか、ふたを持っていただくかをお願いします。これで振り続けていきます。音が聞こえなくなってもどんどん振り続けてください。そうしますとやがて、バターミルクというのが出てきまして、水の音がしてきます。そこまで振り続けてください。そうしましたら蓋を開けて中を見てください。水の音がしているのに、ずっと振り続けていると、バターがドロドロになってしまいます。振り過ぎに注意です。音をしっかり聞いてください。」



酪農教育ファーム近畿地域の活動について

1. 近畿地域における基本的考え方

「食育基本法」の制定に伴い、農産物の生産現場への理解を求める目的で、農林漁業者や市町村・教育関係機関等が農作業体験の機会を提供する取り組みとして「教育ファーム」という概念が一般化されました。一方全国域では平成10年7月に「酪農教育ファーム推進委員会」が設立され、牧場での酪農体験学習を通じた教育活動を実践するため、学校と生産現場と連動しながら地道に、着実に活動を推進してきた結果、全国における酪農教育ファーム認証牧場は平成21年4月現在で257牧場、近畿地域の認証牧場は12牧場となりました。

このような状況の中で、教育ファームの先駆的な役割を担ってきた酪農教育ファームに対する関心はますます高まり、政府の政策支援の重点も、牧場で酪農体験を行うことを通して「食」や「いのちの学び」を支援することに置かれるようになり、教育的な視点を踏まえた活動として、さらに質的向上を目指すことが必要となってきました。

他方、学校の教育現場においては、平成20年3月に新しい学習指導要領の改訂が告示され、その中では、改めて「生きる力」が教育的な理念として確認されるとともに、子どもたちのコミュニケーション能力の基盤を強化するための言語活動や体験活動の充実、総合的な学習の時間の再確認、環境教育や食育など、酪農教育ファーム活動の学習方法やねらいと直接的に関連する項目が重点化されている。

そこで近畿地域においても平成20年3月21日に「酪農教育ファーム近畿地域推進委員会」を設立し、本格的に活動を開始することになりました。

そして、わが国酪農の安定的な発展に資するための酪農理解醸成活動を実施し、併せて、学校教育現場等における酪農教育ファームに対する広範な社会的ニーズや期待に応えていくため、活動の更なる普及と充実を図っていくこととしております。

2. 近畿地域における酪農教育ファーム活動

A. 平成20年度

(1) 近畿地域における認証牧場及びファシリテーター数

平成20年度当初の認証牧場は12牧場でした。全国的には酪農教育ファーム活動への関心や期待の高まりはあるものの、近畿管内では20年度中の新規の認証牧場はありませんでした。

また、20年度に認証されたファシリテーターの数は、16人でした。

これを地域別にみると、平成20年度末の数は下表の通りである。

| 地域 | 認証牧場 | | | ファシリテーター 20年度 |
|-----|------|------|------|------------------|
| | 18年度 | 19年度 | 20年度 | |
| 滋賀 | 2 | 2 | 2 | 2 |
| 京都 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 大阪 | 1 | 1 | 1 | 3 |
| 兵庫 | 6 | 6 | 6 | 7 |
| 奈良 | 1 | 2 | 2 | 3 |
| 和歌山 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 計 | 11 | 12 | 12 | 16 |

(2) 活動状況

第2回酪農教育ファーム近畿地域推進委員会を開催:平成20年6月20日(金)
平成20年度の活動計画について協議し決定した。

モデル牧場の選定:2牧場以内

おおさか府民牧場:提携校が設定できず、モデル要件を満たさなかった。

西山牧場:提携校として三木市立みなぎ台小学校と協力し活動を行う。

第3回酪農教育ファーム近畿地域推進委員会を開催:平成20年12月15日(月)

推進委員の研修会も同時開催:西山牧場にて実施

第4回酪農教育ファーム近畿地域推進委員会を開催:平成21年3月2日(月)

支援ツールの作成:平成21年3月に牧場マップ完成・配布。

B. 平成21年度

(1) 近畿地域における認証牧場及びファシリテーター数

平成20年度と同数

(2) 活動状況

第5回酪農教育ファーム近畿地域推進委員会を開催:平成21年6月18日(木)
平成21年度の活動計画について協議し決定した。

モデル牧場の選定:おおさか府民牧場と西山牧場

ツールの製作:心音体験機(予備で、搾乳体験機)

酪農体験会(教育関係者)の開催:平成21年8月5日(水)

西山牧場で開催し、昨年の提携校の三木市立みなぎ台小学校から結果報告をもらう。

第6回酪農教育ファーム近畿地域推進委員会を開催:平成21年9月15日(火)

牧場は学校だ ～日本の酪農体験の成功要因及び消費者の意識変化～

「私は、北海道の帯広というところで酪農をしています。帯広は、十勝のほぼ中央に位置していて、もうすっかり寒いです。朝晩の気温は、氷点下です。」

「私のところでは、こちらに来る前3、4日間でチモシーという牧草を蒔きました。初冬まきと言って土の温度が5℃以上にならなくなったときに蒔くと、そのまま越冬して翌年雪が解けて雪解け水で、真っ先に発芽してきます。蒔くと言っても、まだ日中はプラスの温度でドロドロなので、中々仕事できません。なので夜中の12時位に出かけて行き、日の出まで作業します。約18haほど蒔いてきました。」

「帯広市の農業ですが、私も知らなかったのですが、耕地面積が約2万ha、農家戸数が740戸、そのうち酪農を行っているのが95戸くらいです。これを先ほど電卓で割ってみたら農家1戸あたり約28ha経営しているんですね。」

「さて今日は、酪農教育ファームの実践事例と言うことで、まず私の牧場ですが約104ha位経営しています。山林が約40ha、畑が64ha位です。また今現在150頭位牛を飼っています。そのうち搾乳牛が100頭位です。ここ10年位規模が変わっていません。そういう中、酪農専業でやっていますが、平成11年からジェラートショップと言うのを始めました。これは家内がやっています。現在では酪農が3分の2、ジェラートショップが3分の1くらいの売上げの割合です。ですから、ここ数年エサが値上がりしたりとかで牛乳の生産コストが上昇していますが、結構ジェラートショップのおかげで、何とか経営をしております。」

「また、私の牧場では、平成3年から消費者の受け入れを始めました。当初は、誰が見に来るのか？と言うこともありましたが、翌年には600人くらいの人が見に来てくれました。これは、農協や市役所などが口コミで広げてくれたということもあります。」

「そして酪農教育ファームという言葉が中央酪農会議が定義しまして、認証制度などを行っていくわけですが、そのような中で年間約100組、約3000人の子どもたち、消費者が来てくれるようになりました。18年度は3000人以上来たのですが、19年、20年そして今年もそうですが、いっぺんに500人くらい減りました。特に宣伝もしていないのですが、何で減ったかを聞いてみると、小学校6年生の修学旅行で体験に来ていた子どもたち、帯広には特に釧路方面やオホーツク、網走方面から来るのですが、皆さんご存知の旭川の旭山動物園にシフトしてしまったということを知り合いの先生から聞きました。」



「さらに酪農教育ファームの受け入れ人数の表を見ていくと、我々が一番忙しい時期に体験が集中しています。体験を入れてしまうと農作業を減らさなくてははいけなんいですね。そんなことをして本当に百姓と言えるのか。体験者が多くなればなるほど、そういう風に思うのですね。本当に牛にとっていい百姓なのか。そのような葛藤の日々なのですが。メリットとデメリットと言う資料をお手元にお配りしています。教育ファームとは酪農家にとってどんなものなのかを考えて見ますと、消費者交流と言うのはやりたいと思ってやれば、建物も何も要らず、自分の気持ちだけあれば交流はできるんだなと思いました。(略・その他資料参照)」

「酪農教育ファームの活動は、21世紀の農作業なのではないか。消費者と生産者の距離がこれだけ離れてしまって、どんな状況から乳が出てくるか分からない人たちに生産現場を教えること。教育ファームは来てくれる学校の先生たちの立場もありますが、我々がそういうスタンスでやるべき活動ではないかと思います。」

「最後に、私のもうひとつの顔は、絵本作家です。降って沸いたような話ですが、平成18年に牛乳の消費拡大に絵本を作ったという話がありました。絵を書いた人は、帯広畜産大学を卒業してイラストレータになった人です。」



酪農教育ファームの現状において、酪農家の視点から見たメリットとデメリット

メリット

1. 投資のいらぬ消費者交流ができる（投資不要）
2. 様々な消費者グループが酪農教育ファームを利用するため、酪農という仕事や牛乳・乳製品を身近に感じることで、消費拡大につながっている。（消費拡大）
3. 消費者と直接触れ合うことで、後継者などが酪農に対して新鮮な視点が持てる。（自信）
4. 安心・安全に配慮した生産活動につながる（信頼）
5. 第一線を退いた経営者や家族の新たな生きがいを提供する。（人材活用）
6. 自分なりのメッセージ（命、育種、環境問題、リサイクル、食糧問題、人口問題など）を持ち、発信することで、それに共感する人々や様々な情報が集まってくる。（情報収集）
7. 消費者交流によって、自分の農場の立地条件などを客観的に理解し、新たな起業をする上で経営上の判断材料になる。（起業）
8. 酪農経営を、個々の視点ではなく、国や世界、地球規模の視点に置き換えて考えられる（農業の意義）環境や食糧安全保障。

デメリット

1. 受け入れが夏から秋に集中し、そのため受け入れ予定日を分散しても天候などの事情により受け入れと仕事が重なってしまうことが往々にしてある。（家族理解・労働過重）
2. 事前打ち合わせなどは、夕方の作業と重なることが多い。（家族理解・労働過重）
3. 自分の農場のあり方や考え方を正当化するあまり、同業他者を非難する。（多様性の排除）
4. 貧弱な知識で間違った情報を消費者に与えてしまう。（誤発信）
5. 利用者側に「酪農家のボランティア」という認識があり、受け入れに最低限のコストがかかっているという意識が薄い。（コスト意識）

酪農教育ファーム近畿地域認証牧場研修会 事前アンケート結果

1. 認証牧場に認証されて以前と変わったところは？
 - 学校等からの団体の予約が増えた
 - 牧場の役割や家畜の命の恵み
 - いろいろな研修会に参加でき、各地の受け入れ状況が勉強になった。また衛生面など受け入れ態勢に気を使うことが多くなった
 - 牧場を見てほしい気持ちが大きくなった